

第46回 城戸賞 応募作

赤いキャベツを抱きしめて

五藤 さや香

あらすじ

小説家志望の文哉（25）は末期癌の母親・真弓が溺愛する妹・梨花（23）の行方を探している。

妹とは言っても実の妹ではない。事故死した妹の代りに養子としてやってきたのである。行く先々で大人から気に入られようと自分を偽ってきた梨花は、今では文哉と真弓を嫌悪しておりお見舞いはもちろん、電話にすら出ない。

文哉はキャリアウーマンの英里子（39）と結婚しているが、初めての相手であり、喫茶兼スナックを経営している美也（45）から離れられない。美也もまた文哉を手放そうとはしない。

一方、妊娠・臨月近い梨花は彼氏・ワタルに逃げられ、実の母・邦子を訪ねる。男と別れたばかりの邦子は梨花を一旦は梨花を受け入れるも、男が戻ってくるや梨花に出て行ってほしいと言う。

行く当てのない梨花は養子縁組幹旋所「キャベツ畑」を頼る。

また不妊に悩んでいた英里子は養子を貰いたいと言出し、養子縁組幹旋所「キャベツ畑」に登録する。

梨花のお腹の子と文哉・英里子夫婦はお互い相手を知らない内に養子縁組を進められる。

やがて梨花は赤ん坊を出産。ほどなく養子がやってくる。知らされた文哉は英里子と別れ、美也と逃げる決意をする。

しかし英里子が妊娠したと知らされ、心変わりした文哉は美也へ別れを切り出す。

文哉を手放したくない美也。二人は互いに包丁で刺し合ってしまう。

その時、母から掛かってきた電話で梨花が赤ん坊を連れて病院へやってきたことを知る。養子に出すのをやめたのだ。そして母は文哉に辛く当たってきたことを詫げる。

電話を切る文哉。朦朧とした意識の中で美也が店を燃やして欲しいと頼む。捨てた息子が受取り人の保険がこのままでは下りないのだ。

ライターオイルを巻いて、火を点ける文哉。二人は炎に包まれる。

登場人物表

- 渡辺 文哉（8、13、25）：小説家志望のウェブライター
- 渡辺 梨花（7、11、23）：渡辺家の養女で文哉の妹。
- 島袋 美也（45）：喫茶店兼スナック「はえばる」のママ。
- 渡辺 英里子（39）：文哉の妻。
- 渡辺 真弓（48、65）：文哉の母。
- 金城 隼人（25）：美也の息子。
- 渡辺 和彦（50、67）：文哉の父。
- 江口 智則（42）：民間の養子斡旋事業所「キャベツ畑」の所長。
- 加藤 千夏（28）：江口の部下。
- 新井 邦子（43）：梨花の実母。
- 知子（37）：英里子の妹
- 英里子の母（68）
- ワタル（22）：梨花の彼氏
- 亜実（6）：文哉の死んだ妹。

○ 道路 (17年前)

カーブミラーが設置された一方通行の道路。集団登校している小学生の子供の中に文哉(8)と妹・亜実(6)の姿がある。建物と車道の間、狭い路側帯を歩く子供達。

童謡「静かな湖畔」を輪唱しながら歩いている。

子供達「静かな湖畔の森の影から：：カッコー、カッコー、カッコーカッコーカッコー」

セメントの石垣沿いに歩いていると、友達が文哉に話しかける。

後ろを向く文哉。

妹の手が離れ、一人でどンドン歩いて行く。

ランドセルの横にかけた巾着の給食袋にはアップリケで『あみ』と名前がついている。

漫画を歩き読みしながら友達と歩いている文哉、列から遅れをとる。

文哉の耳に悲鳴とどよめきが聞えたと思った瞬間――衝撃音。

小学生の列に突っ込んだトラックが石垣にぶつかって止まる。

悲鳴、泣き声。

通行人達が立ち止まり、遠巻きに見ている。

車から逃げ離れる子供達の中に妹の姿はない。

口から泡をふいて意識を失った運転手。アスファルトの上を血が黒く流れてくる。

その先を辿ると、石垣とトラックの間に挟まれた赤いランドセルと給食袋。

○ 病院 遺体安置室 廊下

婦人警官と椅子に座っている文哉（8）。
真弓（36）がやってくる。

立ち上がった文哉の頬をぶつ。

真弓「道路では必ず手をつなぎなさいって言ったでしょ！」

文哉「……」

真弓「言ったでしょ！ 言ったわよね！」

婦人警官「渡辺さん、息子さんもショックを

受けていますから」

真弓「娘はっ?! どこですかっ?!」

婦人警官「ご遺体は、かなり損傷していて：

：ご主人を待たれた方が」

真弓「亜実ちゃん、亜実ちゃん」

婦警を振りきって、遺体安置室へ入っ

ていく真弓。

真弓の声「亜実くくくくっ」

悲鳴のような慟哭が廊下に響き渡る。

廊下に取り残された文哉、両手で耳を

ふさぎ下を向く。

○ 同 玄関

T 一年後

玄関の前に立ちすくむ文哉。

真弓に手を繋がれて、お人形さんの様に愛らしい女の子・梨花（7）が立っている。

真弓「（上機嫌で）妹が、帰ってきましたー」

文哉「……」

梨花「……」

真弓「なーんてね。実は教会で神父さんが引き合わせてくれてね、今日からウチの子になるのよ（梨花を見て）ねー」

文哉「……」

和彦が梨花の荷物を持って来る。

和彦「それじゃあ、まだ仕事があるから」

素っ気なく出ていく和彦。

部屋の奥で電話の鳴る音が響く。

真弓「あら、」

真弓、慌てて靴を脱いで中へ入っていく。

取り残された文哉と梨花。
文哉、恥ずかしいような、好ましいよ
うな。

文哉「上がりなよ」

靴を脱いで上がろうとする梨花の手を
取る文哉。
手を振り払われる。

文哉「！」

梨花「あんたの親、盗ってやる」

子供とは思えないドスの聞いた声。

○ 英里子のマンション リビング

文哉の声「彼女は、見た目ほど美しい子では
なかった。残念ながら」

ノートパソコンに向って文字を打って
いる文哉（25）。

ソファには座らず、床に座ると背の低
いリビングテーブルに置かれたパソコ
ンの高さと視線がちょうどいい高さに
なっている。
パソコン画面が、タイトルのページま
でスクロールする。

○ タイトル『赤いキャベツを抱きしめて』

○ ライブハウス 入口

壁にポスターが乱雑に貼られた地下へ
と伸びる通路を文哉が歩いて来る。

奥からは防音扉にも関わらず音が漏れ
ている。

チケットを売っているのはピアスとス
タッフだらけのパンクファッションの
男。

文哉「すみません、ガウリーってバンドなん
ですが」

スタッフ「ガウリーなら三番目だけど」

文哉「あの、ボーカルに会いたいですが」

スタッフ「関係者以外立入禁止」

客が入りするたびに爆音が漏れ出る。

文哉「妹なんです」

スタッフ「はあ？」

文哉「(大声で) 妹なんです！ 母が病気になるです！」

スタッフ、顎で背後のカーテンを指す。

文哉「すみません」

文哉、カーテンの奥に入っていく。

○ 同 倉庫兼楽屋

ドアをノックする文哉。

誰とも知れない「開いてるー」という声。

文哉「失礼します」

文哉がドアを薄く開けると向うから勢いよく開かれ、ギターやスティックを持ったバンドメンバーがガヤガヤと出てくる。

見送った後、部屋に入る文哉。

金髪の女が奥で背中を向けてメイクしている。

文哉「梨花？」

近づく文哉、女が振り返る。

文哉「エッ!!」

まるで女子プロレスラーの様なメイク・風貌に面喰う文哉。

男A「梨花に何のようだよ」

振り返ると顔中ピアスだらけの男が立っている。

男A「お前、梨花の何なんだよ」

文哉「あああ、兄です」

男A「嘘つけ！」

凄まれる文哉。

男B「梨花なら辞めたよ」

文哉「辞めた？」

男B「てゆうか辞めさせた。アイツ、メンバーと寝るからさ」

男A、壁を殴って、

男A「何でワタルとなんだよ！」

文哉「……」

男B「おかげでバンドがメチャクチャだよ」
外から「そろそろお願いしまーす」の

声。
バンドメンバー達が出ていき、取り残される文哉。
壁に『ガウリー』と書かれたバンドのポスターが貼られている。
破れかけたポスターの中央に梨花が写っている。

○ 産婦人科 待合い室

スマホ画面に映し出された動画投稿サイトには梨花が歌うライブ映像。
モヒカン刈りの男・ワタルが貧乏ゆすりのように足でリズムを取っている。
イヤホンから漏れ出るシャカシャカ音。
キャリアウーマン風の女・英里子(39)が迷惑そうに一瞥する。
診察室からパサついた金髪の女・梨花

(23) が出てくる。
立ち上がるワタル。

ワタル「大丈夫？ 座って」

梨花、英里子の隣にドサツと座る。

梨花の目立ち始めたお腹を見る英里子。

英里子「(悔しくて)」

○ 英里子のマンション リビング

ドアがガチャガチャと開く音。

文哉、パソコンを閉じる。

英里子、部屋に入るやバッグをソファに投げ出し、メガネを外してローテーブルに置く。

英里子「あくっあ」

文哉「また、着床してなかったの？」

英里子「してなかった。また、着床してなかった。また！」

文哉「カリカリしないで。その内、」

英里子「私が今、どんな気持か分かる？」

文哉「そりゃあ、」

英里子「試験に落ちた気分」

文哉「は？」

英里子「皆が当たり前前に受かる試験に毎月毎

月、落ち続けている気分」

文哉「僕に問題があるのかも」

英里子「誰が見たって私に決まっている……あ

く、頭に来る。頭の悪そうな金髪女が妊娠

して、なんで私は妊娠しないのよ！」

クッションを殴り、突っ伏して泣く英

里子。

背中を撫でようとする文哉に、

英里子「触らないでっ」

ビクツと手を引く文哉。

ノートパソコンを手に、静かに家から出る。

○ ハンバーガーショップ

席で座っている梨花の元に、ワタルが

ハンバーガーやドリンクを乗せたトレ

イを運んでくる。

ワタル「お待たせー」

テーブルの横にはキャリーケースとギ

ターケース、スポーツバッグが二つ置

かれています。

ワタル「お腹空いただろ、さ、食べて食べて」

梨花、カップに入ったミネストローネ

を見て、

梨花「こんなの頼んでない」

ワタル「必要だろ、ビタミンとかミネラルと

か」

梨花「こういうスープ、好きくない」

ワタル「一口でいいから、飲みなよ」

梨花、匂いを嗅ぐようにカップに口に

近づける。

梨花「やっぱ無理」

カップを置く梨花。

ワタル「しょうがないなー。じゃ俺が飲つも

う」

ワタルの携帯が鳴る。

ワタル「もしもし、あ、母ちゃん」

ワタル、立ち上がると携帯で話ながら

外へ出る。

梨花、カップの中にツバを吐き、置く。

ワタルが戻ってくる。

ワタル「到着するの、何時かって」

梨花「実家行ったりして、大丈夫なの？」

ワタル「へーきへーき」

梨花、髪を一房つまんで、

梨花「黒く染めときゃよかった」

ワタル「大丈夫だよ、俺もこれだし」

ワタル、自分の髪を撫でながら、カッ
プを口に運ぶ。

ワタル「(スープを飲んで)うまつ」

ワタルを上目遣いに見て、暗い笑みを
浮かべる梨花。

ワタル「何？」

梨花「何でも……ちよつとトイレ」

梨花、席を立ち、トイレの扉を開いて
中へ入っていく梨花。

ワタル「……」

扉の閉まる音が聞こえるや、ギターケ
ースとスポーツバッグを掴んで、慌て
て店を出る。

トイレから出てくる梨花。

ワタルとギターケース、バッグが消え
ているのに気づく。

梨花「(舌打ち)」

○ 歩道

文哉が立っている。

道向うには喫茶兼スナック「はえばる」
の看板が見える。

店の扉が開き、客が出ていく。

文哉、逡巡するも、道を渡る。

○

喫茶兼スナック「はえばる」 店内

純喫茶風の店内に琉球紅型の布で飾り

つけられたアンバランスなインテリア。

壁にはゴーヤチャンプルーやソーキそ

ばと書かれたメニューが貼られている。

美也(45)が中年男の一人客と談笑し
ている。

カウベルの音が鳴り、ドアが開く。

暗い顔をした文哉がノートパソコン片手に入ってくる。ママの美也があざやかな笑顔で文哉に近づく。

美也「やっぱ戻ってきたねネー」

黙ってボックス席につく文哉。

美也「何、暗い顔して。さては、お嫁さんとケンカしたなあ」

水とおしぼりを置いて、カウンターの
中へ戻る美也。

客「（親指を出して）もしかして、ママのコレ？」

美也「息子さ、息子」

文哉、ポケットからジッポライターを出し、拗ねたように弄ぶ。

コーヒー代をカウンターに置き、客が出ていく。

美也「ありがとネー」

他に客のいない店内にカウベルの音が響くのを俯いて聞いている文哉。

目の前に、タコライスとドクターペッパーが置かれる。

美也「煙草も吸わなくせに、そんなもんいじっちゃって」

文哉、最初は気乗りしない様子でタコライスを口に運んだが、食べ始めると勢いがつく。

美也「文ちゃん、これ食べると元気が出るもんネー」

隣に座って、文哉の頭を撫でる美也。

文哉、顔を上げ、サルサソースにまみれた唇を美也の唇に押し付ける。

美也「やあだ、ソースだらけじゃない」

形ばかりの抵抗。

文哉「辛いんだよ、ママ。とっても辛いんだ」

文哉、美也を椅子に押し倒す。

× × ×
ボックス席に放心したように座っている文哉。

髪の毛が乱れている。
携帯が鳴る。

文哉「もしもし……ああ、母さん。今から行く
こうと思つてたところ……いつもの？具は
何がいい？タコ？イカ？」

トイレから美也が髪を手で整えながら
出てくる。

文哉「じゃ、後で」

文哉、携帯を切る。

美也「誰さ？お嫁さん？」

文哉「母さんだよ。もう行かなきゃ」

立ち上がりかける文哉を背後から抱き
しめて、

美也「アンタは私が育てた男なんだから、離
れられないさ」

文哉「……」

美也「もう別れるとか言っちゃダメだからネ
ー」

文哉、首に巻き付けられた美也の手の
指を口に含み、チュウチュウと吸う。

○ 病院 入院病棟 廊下

病院食を積んだ配膳車を押す音やトレ
イのガチャガチャ音が廊下に響く。

配膳車とすれ違う文哉。

手に提げたナイロン袋の中には紙に包
まれた舟皿が入っている。

○ 同 病室

四人部屋のプレートの一つに『渡辺真
弓』の文字。

文哉が部屋を覗くと一つベッドの空き
があり、二人の入院患者は病院の夕食
を取っている。

他の患者に挨拶しながら、文哉は薄い
ピンク色のカーテンで仕切られたベッ
ドに近づく。

文哉「母さん」

カーテンをそっと開く文哉。

髪を抜けた頭に毛糸の帽子を被った真
弓（65）が目を覚ます。

文哉「寝てたの？」

真弓はリモコンを押して、ベッドの背を起き上がらせる。

真弓「食事時の匂いがムウツと、気持ち悪くって」

文哉「紙包みを外し、舟皿に入った焼きそばをベッドサイドテーブルに置きながら、

文哉「ソースの匂いの方がムツとしそうかどうか」

真弓「独特の匂いがするのよ、病院食って」
真弓「割箸を取って食べ始める。」

真弓「おいし」

文哉「そう？ 新しく見つけた店のやつ」

真弓「うん、ここのおいしい。食べてみて」

文哉「いいよ」

真弓「いいから」

真弓「そばをすくった箸を文哉へ向ける。」

文哉「(戸惑って) いや、いいよ」

真弓「そう」

真弓「気にするでもなく、食べ続ける真弓。」

真弓「……梨花ちゃん、連絡ついた？」

文哉「(首を振って) メッセージは残してるんだけど」

真弓「……また、あの女がさらって行っちゃったのかな」

文哉「あの女って？」

真弓「覚えてない？ 何度かあったでしょう。」

産みの親が勝手に梨花ちゃんを連れだして、自分の家に泊めたりして、その度にお母さん、梨花ちゃんを迎えに行って」

文哉「覚えてるけど、会ったことはないよ」

真弓「一緒に暮らす気なんてなくせに、会いたくなかった時だけ気まぐれに会いに来て、期待させておいてまた捨てて……あんな女に親の資格なんてないわ」

文哉「子供の頃の話だろ。さすがにもう梨花だって、そんな親のこと見限ってるよ」

真弓「じゃあ何で連絡くれないんだろ」

文哉「忙しいだけだと思うよ」

真弓「……お母さん、何か悪い事したのかなあ」

文哉「そんな訳、」

真弓「一生懸命やったつもりなんだけど、色々やって上げたい事、全部やったつもりなんだけど、それがいけなかったのかなあ」
涙声になる真弓。

文哉「(たまらず) それもう冷めてるだろ。温めてくるよ」

焼きそばの入った舟皿を持って部屋を出る文哉。

○ 英里子のマンション 玄関

両手に食材の入ったスーパーの袋を提げて文哉が帰ってくる。

玄関に転がったハイヒール。
料理を作る音が聞える。

○ 同 キッチン

文哉がキッチンを覗くと英里子がハンバーグの形を整えている。

英里子「おかえりっ」

文哉「珍しい、英里子さんが料理なんて」

英里子「たまには、ね」

文哉「嬉しいなあ、ハンバーグ大好きなんだ」

背後から英里子の腰に手を回す文哉。

英里子「なあに、子供みたいに」

そのまま互いの頬にキスし合う二人。

英里子「(ハンバーグの空気を抜きながら)」

：：もう、不妊治療はやめる」

文哉「そうなの？」

英里子「だって、最低だもん。イライラして、

文哉に当たって、自己嫌悪に陥って」

文哉「うん」

英里子「子供、いなくってもいいかな？」

文哉「いいよ、別に」

英里子「(身体ごと文哉を向いて) ホントに？」

文哉「だって英里子さん、子供が出来たら僕の相手してくれないでしょ」

英里子「そんなことないよー」
文哉「あるよー」

口づけながら、英里子のスカートをた
くし上げる文哉。

英里子「ちよつと、料理中。手、汚れてる」
英里子、ミンチのついた手がまわりに
当たらないように両手を宙に広げる。

英里子「（笑って）ちよつとお、不妊治療や
めるって言った途端に求めてくるって、ど
ういうこと」

文哉「別に子供を作るためじゃなくていいじ
ゃん」

英里子「そりゃそうだけど」

文哉「嫌だよ、それだけのためって」
その場で性交する二人。

○ お好み焼き屋 外（夜）

キャリーケースを持ち、スポーツバッ
グをたすき掛けにした梨花が店の前に
立ち尽くしている。

扉が開き、客が出てくる。

脇に寄る梨花。

邦子「おおきに。また来てやー」

客を見送りに出た邦子（43）、梨花に
気づく。

邦子「……梨花ちゃん!!」

梨花「……分かるの？」

邦子「そりゃ分かるわ、お腹痛めて産んだ子
やもん。それにしても久し振りやなあ。最
後に会ったんいつや？」

梨花「七歳だったから、十五、六年前」

邦子「エライ大きいお腹して……困ったこと
でもあったんか？」

梨花「別にそういう訳じゃ、」

言葉が途切れ、涙ぐむ梨花。

邦子「とにかく中入り。なっ」

梨花の背中を押す邦子。

○ お好み焼き屋 店内

客のいない店内、カウンター席に梨花

が座っている。

邦子、出来上がった焼きそばをコテで梨花の前の鉄板に寄せ置く。

梨花「わあ」

梨花、箸を手に取り、焼きそばを美味しそうに頬張る。

梨花「美味しい。すっごく美味しい」

邦子「(嬉しそうに) 焼きそばくらいで、大げさやなあ」

梨花「だって、美味しいんだもん」

邦子「(いたずらっぽい顔で) あっちのお母さんより美味しいか？」

梨花「(首をふって) 添加物とかやたら気にして、野菜と玄米ばかりかし。お小遣いで買ったお菓子も捨てられるし」

邦子「そんな味気のないご飯！ 信じられへんわ」

梨花「…：何で会いに来てくれなかったの？約束したのに」

邦子「(涙ぐんで) 向うのお母さんから、会いに来るなって…：梨花ちゃんがいつまでたっても懐かへんからって」

梨花「ひどい…：」

邦子、梨花の傍らに置かれたキャリークーンスを見て、

邦子「…：ウチに来るか？」

梨花「いいの？」

邦子「いくらでもおってエエよ」

梨花「お母さんと一緒に暮らせるんだ…：」

邦子「ほら、焼きそば、はよ食べんと焦げてまうで」

梨花「マヨネーズ、もつとかけてもいい？」

邦子「ええよ、ええよ。たくさんかけ」

マヨネーズとソースを焼きそばに目一杯かけて頬張る梨花。

○ 英里子と文哉のマンションリビング

文哉「ハイ、あ、お義母さん。英里子さん、今お風呂に入ってる…：来週ですか？ 特

に予定は、大丈夫だと思えますけど、ハイ
：：あ、今ちょうど：：え、あ、ハイ：：
タオルで髪の毛を拭きながら、ミネラル
ウォーター片手に英里子が入ってくる。

受話器を置く文哉。

英里子「何？セールス？」

文哉「お義母さん。来週、知子さんとこの二番
目の男の子の誕生日するから、待ってる
って」

英里子「えーっ、断ってよお」

文哉「英里子に代わるって言ったんだけど」

英里子「断るって分かってるからよ。あー、
もー」

文哉「いいじゃん。知子さん、久しぶりの里
帰りでしょ？ 英里子に会いたいんだよ」

英里子「知子の子供達はうるさいから、ママ、
一人で相手するのが嫌なのよ」

文哉「だったら余計に行ってあげないと」

英里子「：：文哉も来てくれる？」

文哉「いいよ、もちろん」

英里子「ホントに？」

文哉「うん」

文哉を抱きしめる英里子。

○ NPO法人「キャベツ畑」事務所 外
マンションの一室。

キャベツの中に赤ちゃんがいるファン
シーな看板。

『養子縁組あつ旋 NPO法人「キャ
ベツ畑』』と書かれている。

○ 同 事務所内

江口智則（42）と加藤千夏（28）がそ
れぞれのパソコンを見ながら打合せを
している。

千夏「昨日、面談した菊池さんですが、その
足で母子診断を受けに行くと言っていました」

江口「何でついていかなかったんだよ」

千夏「別のお母さんのアポが入ってて：：ま

あ、すっぱかされたんですけど」

江口「仕方がないな」

千夏「今日、電話して診断の結果を聞いておきます。あと、メールで問合せがあった方で実父の同意書を取ることができないという人がいて」

江口「なんで」

千夏「父親が誰だかわからないそうです。まあ不明でも申請は出来なくはないですけど」

江口「面談の上、答えるって言っておけ。後から父親が出てきたら面倒だ」

千夏「了解です」

そのままパソコンに向かって作業している江口。

千夏「あの、所長」

江口「なんだ」

千夏「ウチのキャッチコピーについてなんですけど」

千夏、自分のパソコンの画面を江口の方へ向ける。

画面には「赤ちゃん産んで産んでキャッペーン！今なら一〇〇万円の援助あり！」

江口、チラと見て、すぐに自分のパソコンに目を戻し、

江口「嘘じゃないだろ。産むまでの生活費や病院代ももろ、相手先が援助するんだから」

千夏「まるで人身売買じゃないかって、ネットで書かれていますよ」

江口、千夏を見て、

江口「二週間に一人の新生児が死んでんだよ」

千夏「……」

江口「乳児院行きの子供はもつといる。一番親の愛情が必要な時期に抱っこもされずに、流れ作業で育てられたらどうなる？」

千夏「……愛着障害を持った子供は、大人になっても周囲と適切な関係性が築きにくくなります」

江口「児相みたいに慎重になり過ぎて、救え

る子供も救えなかったら意味ないだろ。人身売買？言わせてろ。ウチが年間、何組のマツチング成立させてると思ってるんだ」

千夏「済みません」

江口「パーフェクトな親もパーフェクトな子供もない。上手く行くと祈るしかない」

千夏、少し項垂れて自分のパソコンを見る。

キャベツの中に赤ちゃんがいるファンシーなイラスト。

千夏「……なんでキャベツ畑から産まれてきたんでしょね」

江口「昔の男と女は目隠ししてキャベツ畑へ行って、かじったキャベツの味で恋占いしてたんだとよ」

加藤「(クスッと笑って)恋占いだけで、終わらなかつたんでしょねえ」

○ 喫茶兼スナック「はえばる」外

道向かいから店を見ている男・金城隼人(25)がいる。

○ 同 店内

美也がサーターアンダギーを揚げている。

ペーパーを敷いた皿に入れ、爪楊枝を刺して、カウンターに座っている文哉の前に出す。

文哉、パソコンを見ながら、爪楊枝に刺さったサーターアンダギーを口に入れる。

文哉「あぢ、あぢ」

口いっぱい頬張る文哉。

美也「頬張りすぎでしょー、もう」

美也、冷たい牛乳を差し出す。

文哉、ゴクゴクと牛乳を飲んで、

文哉「……ママの息子って、どんな奴なの」

美也「……」

美也、返事をせずに煙草に火を点ける。

文哉「ねえ、ねえったら。俺と同じ年なんで

しよ」

美也「さあネー。八つの時に別れたっきり会ってないからネー」

文哉「会いたくないの？」

美也、笑顔で文哉の頬を撫でて、

美也「文ちゃんがいるから、いいさー」

文哉「(拗ねて) 誤魔化すなよ」

美也「それより、土曜に来るなんて珍しいネー」

。お嫁さん、休日出勤？」

文哉「母さんの具合が悪いからって、嘘ついて出てきた」

美也「コラー、縁起でもない」

文哉「だって嫁の実家で甥っ子の誕生日だよ」

美也「それはゾツとするネー」

文哉「だろ」

○ 英里子の実家 リビング&ダイニング

テーブルの上にはちらし寿司やから揚げ等のご馳走。

英里子と英里子の妹・知子(37)、母が座っている。

知子は英里子と違ってふっくらしている。

続きのリビングでは8歳、6歳、4歳の男の子がゲームをめぐって騒いでいる。

男の子(6)「早く貸してよ」

男の子(8)「ちよっと待てよ」

男の子(6)「さっきから兄ちゃんばかり」

男の子(4)「ともくんもー」

乱雑に手を伸ばしたはずみで、ゲーム機が床に落ちる。

男の子(8)「ああー、何すんだよ、バカッ」

怒られて、4歳の男の子が泣きながら

知子の元へやってくる。

男の子(4)「お兄ちゃんがー」

知子「コラッ、貸してあげないと取り上げるよ」

男の子(8)「だってえー」

英里子が眉間に皺を寄せながら、グラスに入った白ワインを飲み干し、ワイ

ンボトルに手を伸ばすも、もう空である。

母がチラリと英里子を見る。

英里子「（視線に気づいて）不妊治療やめた」

母「え、どうして？」

英里子「子供なんて、いなくたって」

知子「そうよ、子育てって大変だもん」

英里子、軽く知子を睨む。

知子「（気づかず）仕事もあるし、若いイケ

メンの旦那もいるし、充分よ」

母「文哉さん、仕事の方はどうなの？」

英里子「ウェブライターやってる」

母「食べていけるの？」

英里子「自分のお小遣い分くらいは稼いでる

わよ」

母「まるでヒモじゃない」

英里子「専業主夫よ。お母さんとおんなじ」

母「違うわよ。男が主夫だなんて」

知子「小説家めざしてるんでしょ。前に新人

賞、獲ったって」

英里子「明潮新人賞」

母「あら、すごいじゃない」

英里子「二次通過したただけけど……」

母「（溜息ついて）もっと早くに結婚すれば

よかったのに……」

英里子「どういう意味？」

母「言葉どおりよ。若かったら妊娠だっても

っと簡単に」

知子「孫ならウチのが三人いるから、もうい

いじゃない」

母「そういう事じゃなくて、女は子育てして

こそ、」

英里子「実家でもマタハラって……勘弁して

よ！」

声を荒げる英里子。

母と知子、英里子を見る。

英里子「帰る」

英里子、部屋を出ていく。

○ 喫茶兼スナック「はえばる」外

道向かいから隼人が店を見ている。
文哉が出てくる。

続いて出てきた美也、文哉の頭をクシ
ヤクシヤと撫でながらキスする。

隼人「……」

○ お好み焼き屋（夕）

邦子「あら、いらっしやい」

文哉が入ってくる。

× × ×

邦子が舟皿に焼きそばを入れる。

カウンターに腰掛け待っている文哉。

邦子「毎日お見舞いやなんて、親孝行やなあ。

ホンマえらいわあ」

文哉「そんなことないですよ」

邦子「そやけど、焼きそばだけは食べられる
って、不思議なもんやな」

文哉「抗がん剤で味覚が鈍ってるのか、ソー
スのハツキリした味がいいみたいです」

邦子「なるほどな」

文哉「お婆さんのが一番美味しいって」

邦子「そう言ってもらえたら、嬉しいわあ。

ハイ、六五〇円」

ビニール袋に入れた焼きそばを文哉に
渡す邦子。

文哉、財布から小銭を数枚出して支払
う。

梨花の声「ただいまー。紅シヨウガ、一袋し
かなかったあ」

レジ袋を提げた梨花が入ってくる。

文哉「梨花っ」

梨花「文哉っ」

邦子「なんや、梨花ちゃんの知り合いか？」

梨花「……外で話そ」

梨花、文哉の腕を掴んで店を出る。

○ 公園（夕）

夕日に照らされた公園。

文哉が梨花の後を追ってくる。

文哉「あのお婆さん、もしかして」

梨花「どうやって調べたの？ 興信所？」

文哉「偶然だよ。それより、何で電話出ないんだよ。てか、そのお腹なんだよ。相手は？ 結婚は？」

梨花「知らない」

文哉「ワタルとかって奴かよ」

梨花「(忌々し気に) バンドのメンバーにまで会ったんだ」

文哉「そいつと一緒なのか」

梨花「逃げた」

文哉「(鼻の先で笑って) 中出し、許したお前が悪い」

梨花「…何か変わるかなって思った」

文哉「変わるって、何が？」

梨花「わからない」

文哉「とにかく、お見舞いに行っちゃってくれよ。母さん、会いたがってんだよ」

梨花「悪いけど、無理」

文哉「何だよ」

梨花「あの人のこと、嫌いだもん。最初っから、嫌いだもん。嫌いな相手に好きなふりするのがどれだけ嫌か」

文哉「確かに母さんはこだわりが強く、ヒステリック。気持は分かるけど」

梨花「実の子にわかるわけないでしょ！」

文哉「…」

梨花「私は実の子とは違う。自分の感情出すと、置いてもらえない。預けられて、返さなくて、その繰り返し。だから媚なきやなんない、誰でも彼でも。そうさせる相手も嫌い。だけどそんな自分をもっと嫌い」

文哉「だから鍋にツバ吐いたりしたのかよ」

梨花「…あの人のミネストローネ、大っ嫌いだった」

文哉「…」

梨花「つまらないことばっか、覚えて」

梨花「立ち疲れたのか、ベンチに腰をかける。」

梨花「…ずっと居ていいって言ってくれたんだ。お好み焼き屋さん手伝って、家族三

人で暮らすの。本物の家族だよ……アンタと、あの人の間で暮らすのは、もうウンザリ！」

文哉「……そうだな。母さんも俺も、幼い梨花を利用してたんだな。もう解放してやらなきゃ、だよな」

文哉の言葉に、感情が落ち着いてきて、梨花「……なんで庇ったの？」

文哉「え？」

梨花「お鍋にツバ吐いたのが見つかって、あの人が、潔癖だからすっごい怒って、また施設に返されるかなって……そしたらアンタがこのまま置いてあげてくれて」

文哉「それは……俺のせいで妹が死んだから」

梨花「事故だったんでしょ」

文哉「俺がちゃんと手をつないでいたら死ななかつた」

梨花「それって、あの人から言われたの？」

文哉「……」

文哉の携帯が鳴る。

文哉「（電話に出て）ああ、母さん」

梨花、チラと見る。

文哉「遅くなってごめん、店が混んでて。今から行くから」

携帯を切る文哉。

文哉「行くわ」

文哉、行きかけて、

文哉「焼きそばだけ買いにいてもいいか？」

あの店の味、母さんが好きなんだ」

梨花「別に……勝手にすれば」

文哉、小走りに去っていく。

○ お好み焼き屋

梨花、戻ってくる。

梨花「ただいまー。紅シヨウガ、タッパーに移しとくね」

業務用の紅シヨウガの大袋をタッパー

へ詰め替える梨花。

邦子「あの人がお腹の子の父親か？」

梨花「（吹き出して）まっさかあ」

邦子「ほんじゃあ、今の家の兄弟か？」

梨花「今の家はここだよ」

邦子「……ま、それもそうやな」

淡々と紅シヨウガを移し替える梨花。

店の扉が開き、警官が入ってくる。

警官、手に持った防犯チラシを邦子に渡す。

警官「近頃、この近辺で放火が頻発してまして」

邦子「角の美容院やろ。廃品回収で出してた雑誌に火いつけられたって。聞いた聞いた」

警官「燃えやすいものは、くれぐれも外へ出さないで下さい」

警官、去っていく。

○ 喫茶兼スナック「はえばる」外（深夜）

最後の客を見送り、立て看板のコンセントを抜いて消す美也。

隼人がやって来る。

美也「（顔を上げて）ごめんネー、今日はどう終り……」

隼人を見て、

美也「……隼人……隼人なの！？」

隼人、手に持っていた△△の茶封筒を美也に叩きつける。

中に入っていた書類が地面に落ちる。

生命保険証書、契約者は「島袋美也」

受取人は「金城隼人」と書いている。

一緒に落ちた写真、若い頃の美也と夫、

五歳くらいの男の子と三歳くらいの女

の子が写っている。

隼人「こんなもん、誰が受け取るか！」

激しい拒絶に言葉の出ない美也。

立ち去ろうとする隼人に思わず手を伸ばす。

隼人「触るな！ 人殺しが！」

美也、ビクリと、手を引っ込める。

足早に立ち去る隼人。

美也、項垂れしやがみ込んで、書類を拾う。

○ 英里子の職場

日本人従業員の中に外国人も数人混じって仕事をしているオフィス。書類を抱えて歩いている英里子の前から、金髪の女性・ケイトがやってくる。

ケイト「ハイ、エリコ！」

英里子「ケイト！ いつ日本に来たの？」

ケイト「昨日ついたばかりよ」

英里子「何年ぶりかしら？ 私がNYにいた頃だから、十年ぶり？」

ケイトの携帯が着信する。

ケイト「ちよっと待って」

電話に出るケイト。

ケイト「(英語) ……ごめんね、ママ今、仕事
中なのよ…:…ちゃんと歯磨きしてね。愛してる」

電話越しにキスして通話を切るケイト。

英里子、表情を曇らせながらも笑みを浮かべて、

英里子「子供がいるのね」

ケイト「ジェシカよ。五歳なの」

ケイトから見せられた携帯画面に黒人の五歳くらいの女の子が写っている。

英里子の顔に驚きの表情。

英里子「ニックと別れたの？」

ジェシカ「(笑って) ジェシカは養子よ」

英里子「養子…:…どうして？」

ジェシカ「理由なんてないわ。ただ育てたかったから」

英里子「ただ育てたいって」

ジェシカ「大事なのは責任を持って育てる気があるかどうか、でしょ？ 子供と過ごす
毎日
は本当に素晴らしいわ」

英里子「…:…」

○ 神社(夕)

小さな神社、お祭りの前を通りかかる
文哉。

様々な出店が並んでいる中で、リンゴ
飴の店が目に入る。

文哉「……」

○ お好み焼き屋 外

リンゴ飴の入った袋を持った文哉が歩
いてくる。

梨花が出てくる。

文哉「あ」

梨花も文哉に気づく。

文哉「リンゴ飴、買ってきた」

文哉、袋からリンゴ飴を取り出して見
せる。

梨花「……」

○ 公園

ベンチに座って文哉と梨花がリンゴ飴
を食べている。

梨花のは赤く、文哉のは緑。

梨花「……昔、お年玉で買って食べたよね」

文哉「お前、俺のお年玉よく盗んだろ」

梨花「つまらないこと覚えてんなあ」

梨花、舌をベーツと出して、真っ赤に
染まっているのを見せる。

文哉も同じように、緑色に染まった舌
を見せる。

文哉「舌の色で母さんに見つかって、怒られ
たよな」

梨花「そんな人が今は焼きそばが好きって笑
わせるわ。てゆうか、自然食にこだわった

挙句にガンって、どうゆうことよ」

文哉「ああいうタイプはストレス溜めやすい
んだよ」

梨花「そういや、いつつもイライラカリカリ
してた」

文哉「あれでも梨花が来てから、マシになっ
た方だよ。亜実が死んだ時はもっとひどか
った」

梨花「……」

文哉「ごめん」

梨花「で、今日は何の用」

文哉「……ずっと、謝らなきやと思ってたんだ」

梨花「何」

文哉「お前が小学五年の夏に、その、具合が悪くて部屋で寝てた時、」

梨花「言わないで！」

梨花、文哉に食べかけのリンゴ飴を投げつける。

梨花「キモッ」

足早に立ち去る梨花。

文哉「あ……あー、もうっ」

立ち上がるも追いかける事も出来ず、額を手で押さえる文哉。

文哉の手から落ちた緑のリンゴ飴が、地面に落ちた赤いリンゴ飴とぶつかり転がる。

○ 英里子のマンション リビング

パソコンに向って小説を書いている文哉。

文哉の声「中学一年の夏、学校から帰ってくと母さんが赤飯を焚いていた。「今日は赤飯よ」と母さんは機嫌が良さそうだった。「梨花は？」と尋ねると、「一階で横になっていると答えた。赤飯は炊飯器ではなくセイロで、たいそう大袈裟に湯気が立っていた。夕食の席では、梨花は血の気のない顔で、僕も気まずくて、母さんだけが幸せそうだった。梨花は小学五年生だった」手を止める文哉。

○ 渡辺家 梨花の部屋（12年前）

梨花の部屋の扉をそつと開ける文哉。
キャミソールとショーツパンツ姿の梨花が腰にタオルケットをかけて眠っている。

文哉「梨花、梨花」

眠り続ける梨花。

文哉、梨花のベッドの前で膝をつく。

梨花のすんなり伸びた足、ずれ落ちた
キャミの肩紐、柔らかそうな唇、寝息。

文哉「……」

文哉、ズボンのチャックを外して、自
慰し始める。
息苦しげに目を閉じ、開く。

文哉「！」

梨花が目を開いている。
驚きと恐怖と軽蔑の目。
文哉、慌ててその場から走り出る。

○ 道路

道路脇の道を走る文哉。

雨が降ってくる。

息が切れて、立ち止まる。

道向うに喫茶兼スナック「はえばる」
が見える。

○ 喫茶兼スナック「はえばる」 店内

テーブルの上に食べかけのタコライス。
美也が文哉に口づけながら、チャック
を下ろしたズボンの中に手を入れてい
る。

○ 英里子のマンション リビング（現在）

自慰している文哉。

英里子の声「ただいま」

慌てて、チャックを上げる文哉。

英里子が入ってくる。

文哉「お、お帰り」

英里子「ただいま」

ソファに座り込む英里子。

文哉、パソコンを閉じて、英里子の隣
に座り、口づける。
長いキス。

英里子「ねえ」

文哉「何」

英里子「養子もらわない」

文哉「！」

驚き咳き込む文哉。

英里子「血のつながりがなくなつて親になれるわよ」

文哉「言つたでしよ、妹が養子だつて。僕らの結婚式にも来ない、母さんの見舞いにも来ない。家族のきずななんてそう簡単に出来ないんだよ」

英里子「物心つく前の、生まれて間もない赤ちゃんなら大丈夫よ」

文哉「……今度は何があつたの？」

英里子「理由なんてないわよ。ただ育てたい、それだけよ。本能よ、母性よ。それ以外何もない。いえ、それ以外に何が必要だつていうの」

文哉「実家で何か言われた？ それとも友達か同僚が養子を貰つた……どうせそんなとこでしよ」

英里子「……当り」

文哉「英里子さん、いつつもそうだよ。同窓会で皆が子供の話をするのが悔しいとか、知子さんが里帰りするたび当てつけみたいで腹が立つとか……対抗心しかないじゃない？ 子供を手放す親の気持とか考えたことある？ 引き取られる子供の気持とか考えたことある？ それをペットでも飼うみたいに簡単にさあ」

恨めしそうに唇をつぐむ英里子、目に微かに涙が浮かんでいる。

文哉「ごめん、言い過ぎた」

英里子「ううん、当たつてる。対抗心、その通りだわ。私だけなんで、私だけなんでつて、つい思っちゃう」

文哉「英里子が悪いわけじゃないから」

英里子「（涙が溢れて）皆と同じように赤ちゃんと産んでみたい。それがダメなら、せめて抱っこしてみたい、哺乳瓶でミルクあげて、おしめ替えて」

文哉「わかった、わかったから」

英里子「うらやましいの。子育てが大変つて言つてる知子がうらやましいの」

文哉「……」

英里子、ティッシュで派手に鼻を噛む。
ひとしきり泣いて落ち着いたのか、
英里子「もう寝るわ」
英里子、寝室へ入っていく。

○ 同 寝室。

床に服を脱ぎ散らかして、ベッドに横
たわっている英里子。

文哉「英里子さん」

英里子「……」

文哉「お化粧、落とさなくていいの？」

英里子、返事しない。

文哉「……いいよ、養子の事、英里子さんの

好きにして」

英里子「……」

文哉「寝ちゃったの？」

文哉、床に落ちた服を拾って、出て行
く。

英里子、目を開ける。

○ 邦子のアパート 外（深夜）

梨花と邦子が歩いてくる。

邦子「あー、忙しかったなあ」

梨花「でも儲かったねー」

邦子「儲かった、儲かった」

二階建てのアパートの一階、邦子の部

屋の前に五、六十代の男が座っている。

男、邦子を見ると立ち上がる。

邦子「あんたっ、」

男「邦ちゃん」

男に駆け寄る邦子。

邦子「もう、どこ行ってたんよ。心配してん
で」

仲睦まじい様子の邦子と男。

離れたところから見ている梨花。

○ 同 室内

台所と一間あるだけの部屋。

スエットに着替えた男がこたつに入っ
てビールを飲みながらくつろいでいる。

台所では邦子がつまみのスルメを炙っている。

邦子「もう、出ていかんといてや」

男「ごめんごめん……それより、」

男、部屋の隅に布団を敷く梨花を見て、
男「邦ちゃんにこんな大きな娘さんがいたとはなあ」

男、値踏みするような視線。

梨花「……」

邦子、マヨネーズと醤油を添えたスルメを持ってきて、

邦子「私も若い頃は、細かったわ」

男「邦ちゃんほっちゃんりしてるのがいいんだよ」

邦子「調子ええこと言うて」

入っていけない梨花。

梨花「私、疲れちゃったから、先寝るね」

男「電気、明るいだろ」

梨花、背を向けて、頭から布団を被りこむ。
邦子と男の笑い声が聞こえてくる。

○ 英里子のマンション 寝室（朝）

朝の光が差し込んでいる。

目を覚ます文哉。

隣に英里子はいない。

サイドテーブルに置いてある携帯を手に取る。

九時十五分。

時間を見て慌てる。

○ 同 リビング

文哉「英里子、さん？」

英里子がノートパソコンを見ながら、携帯で話している。

英里子「では、本日さっそく伺いますので」

電話を切る英里子。

文哉「ごめん、寝坊しちゃって。会社は？」

英里子「休んだ。それよりこれ見て」

文哉、パソコンを見ると、NPO法人

『キャベツ畑』のホームページ。

英里子「私の好きにしていっていいって言ったよね」

文哉「言ったけど……」

英里子「午後一時にアポとったから」

文哉「え、それって僕も行くの？」

英里子「もちろん。予定でもあるの？」

文哉「いや、もうちよっと考えてからの方が
よくない？ 昨日の今日で、」

英里子「すぐに赤ちゃん紹介してもらえるわ
けじゃないのよ。登録だけでも早くしてお
かなきゃ」

文哉「……仕事、早っ」

英里子「ここに書いてあることくらいは読ん
でおかないといけないわね……えーっと、
そもそも普通養子縁組と特別養子縁組の違
いとは」

○ N P O 法人『キャベツ畑』事務所

千夏「普通養子縁組と特別養子縁組の違いで
すが、普通養子縁組の場合は実親との縁は
切れず、戸籍上も養子と記載されます。つ
まり実親と養親両方持つことになるんです。
特別養子縁組ですと実子同様、長男・長女
等と戸籍に記載され、実親との縁も切れる
ことになります。六歳までと年齢の制限
があります。ちなみに里親の場合は一切の
親子関係は生じません」

英里子「実際は何歳くらいの子供が多いんで
すか？ 出来れば小さい方が、」

千夏「私もは主に出産前のマッチングを手
掛けています。養親希望者から生活費など
の援助をしてもらえることで、実親に安全
に出産していただけます」

文哉「生活費って僕らが払うんですか？」

千夏「大体二三ヵ月分の生活費と、病院代な
ど出産にかかる費用で平均一〇〇万円くら
いでしょ。D Vなどで引越しが必要な
方ですとさらに、」

文哉「一〇〇万！」

千夏「あと、出産して引き渡しが成立しまし

たら、成立料として七〇万円、家裁の費用が約三〇万円。その他、登録費用、研修費も掛かります」

文哉「児童相談所とかだったら、」

千夏「無料ですね」

文哉「じゃあ」

英里子「バカね。兎相なんて競争率高くて、何年経っても紹介してもらえないわよ」

千夏「近頃は虐待問題に忙しくて、養子縁組まで手が回っていないのが実情です」

文哉「でも二百万以上も掛かるなんて」

英里子「もう、お金の事ばかり言わないでよ。

不妊治療のこと考えたら、二百万くらい」

文哉「だって生活保護もあるじゃん。援助っ
て言うけど、これじゃ何だか、お金で赤ち
ゃんを買ってるみたいでさ」

千夏「実母さんの中には一度生活保護の申請
をして、断られた方もいますので」

文哉「僕らが一緒に役所へ行って事情を説明
すれば」

千夏「もちろん、私達も最初はそうお伝えし
ています。でもほとんどの方が二度と行き
たくないって言います。助けを求めに行っ
ただけなのに、あれこれ詮索されて説教ま
でされて、あげく追い払われて、二度とあんな
ところ行きたくないって……当然ですよ
ね」

文哉「……」

英里子「……」

千夏「無理強いらしたら、今度は私達の元から
消えてしまいます。赤ちゃんのためにも、
それだけは何としても避けなければいけな
いんです」

英里子「すみません。夫がズケズケと」

千夏「いえ、はつきり聞いていた方がいい方
いいんです。遠慮してあまり聞かない方が
多いんですよ。赤ちゃん紹介してもらえな
いんじゃないかって。それってトラブルの
元ですから。他に何か気になることはあり
ませんか」

文哉「あの」

英里子、チラと文哉を睨む。

文哉「(気づかず) 特別養子縁組だと実子に
なるってことなんですが」

千夏「はい、そうです」

文哉「だったら親が知らせなきゃ、本人は養
子だったこと知らないままってことですか
？」

千夏「私どもでは、早めの真実告知をすすめ
ています」

文哉「でも戸籍にも実子って記載されるんで
すよね」

千夏「ええ。ただ養子縁組を届け出た裁判の
事項や、産みの親から除籍した旨も記載さ
れるので、大人になつてから知ってシヨッ
クを受ける方も多いんです」

文哉「なるほど」

英里子「あの、登録はまた日を改めて来てもい
いですか」

千夏「わざわざ来ていただかなくても、ネッ
トから登録できますよ。あとは法定研修を
受けて、マッチングの段階になればこちら
から家庭訪問させていただきますので、も
うここに足を運んでいただく必要はありま
せん」

文哉「……」

英里子「……」

S N Sの通知音。

千夏「すみません」

千夏「携帯をチェックする。」

千夏「すみません、実母さんから連絡があり
まして、すぐに対応してあげないと消えち
やうこともあるんで」

英里子「あ、じゃあ私達はこれで」

携帯をチェックする千夏。

事務所を出る文哉と英里子。

○ 喫茶兼スナック「はえばる」(夜)

美也が三線を引きながら沖縄民謡を歌
っている。

数人の団体客がボックス席で手拍子している。

文哉が入って来て、カウンターに座る。

歌い終わった美也、文哉の隣に座る。

美也「どうしたの、こんな時間に」

文哉「(頭を抱えて) 不妊治療の次は、養子だつてよ……」

美也「あらまあ、そりゃ大変だ」

文哉「俺だけじゃダメなのかな。俺は嫌だよ。

別の人間が入ってくるなんて」

文哉の頭を撫でる美也。

○ お好み焼き屋(夜)

梨花「今日は暇だね」

客のいない店内、邦子は客席に腰掛け、梨花は各席のソースを注ぎ足している。

邦子「……なあ、お腹の子、どないするつもりや」

梨花「どうって」

邦子「ちよつと調べてみてんけどな」

邦子、養子縁組斡旋所の資料を出す。

梨花「育てるつもり、なんだけど」

邦子、頭を振って、

邦子「無理無理無理」

梨花「そりゃ一人じゃ無理だけど、」

邦子「ウチかつて、ずっとおられても困るし」

梨花「……」

邦子「渡辺の家に戻ったらどうや。そうや、それがええわ。それで時々赤ちゃん連れて店に遊びに来たらええやん、なっ」

梨花「……」

梨花、差し出された資料の一枚を手に取る。

そこには『赤ちゃん産んで産んでキャンペーン！今なら一〇〇万円の援助あり！』の文字。

○ 道(深夜)

隼人が道路を挟んで向うにある喫茶兼スナック「はえばる」を見ている。

店から文哉と美也が出てくる。
キスする二人。

隼人「……」

店の中へ戻る美也。
隼人、文哉の後をつける。

○ N P O 法人「キャベツ畑」事務所
面談用のデスクの前に座っている梨花。
傍らにキャリーケースとスポーツバッグ。

梨花の前には江口と千夏が座っている。

江口「ウチで借りてる部屋がちょうど先週空
いたところなので、今日から使っていただ
けますよ」

梨花「はあ」

江口「今後はこの加藤が担当します。ちよつ
とおしゃべりなところもありますが根はい
い奴なんで、何でも言っ下さい。ウザい
時は無視してもらっていいですから」

千夏「(江口を軽く睨んで)」

梨花「はあ」

千夏「(カラ元気で) じゃ、渡辺さん、さつ
そく案内しますね」

キャリーケースに手を掛ける千夏。

梨花「触らないでください」
荷物を自分で持つ梨花。

○ ワンルームマンション

千夏、鍵を開けながら、

千夏「ちゃんと母子検診受けてくれていて安
心しました。臨月間近で一度も病院へ行っ
てないなんて人もザラなんで」

梨花「はあ」

千夏、ドアを開けて、

千夏「どうぞ、どうぞ」

靴を脱ぎ、中へ入る梨花。

千夏「必要なものは一通り揃ってると思いま
す」

梨花、無言で部屋を見回している。

千夏「(沈黙が耐えられなくて) ちょうど条

件にピツタリな御夫婦が先日いらして、ちよつと運命感じちやいました。このマツチング、きつと上手く行きますよ」

梨花「……休みたいんですけど」

千夏「あ……すみません」

梨花「今月分の生活費って、今日貰えるんですか？」

千夏「あ、はい」

千夏「あ、はい」

千夏「何かあつたらすぐメール送って下さい。

いつでも、どんなことでも結構です。でも

ちろん直接話したい時は、」

梨花「話すとか面倒なんで」

千夏「ですよね……じゃ、私はこれで」

部屋を出る千夏の後ろ姿を、冷めた目で見ている梨花。

○ お好み焼き屋

文哉が入ってくる。

邦子「いらっしやい。今日もタコでええのん？」

文哉「あ、はい」

邦子、冷蔵庫から焼きそばの麺を取り出す。

文哉「(店を見回して) あの、梨花は？」

邦子「え、アンタんとこに帰ったんやなかつ

たん？」

文哉「どういう事ですか？」

邦子「一週間くらい前に荷物持って出て行っ

たんやけど」

文哉「はあっ！ 梨花と一緒に暮らすんじや

なかったんですか？ 子供を育てるんじや

なかったんですか？」

邦子「そんな無理に決まってるやん。うち、彼氏もおって、三人でも狭いのにもう一人

増えるやなんて」

文哉「無責任じゃないですか」

邦子「しゃあないわ。勝手に子供作っただんは

あの子やもん」

文哉「寂しい時だけ梨花を可愛がって、面倒

になつたら放り出して……何回も捨てられる梨花の気持ち、考えたことあるのかよ」
邦子「そんなん言うたって、こっちはこっちの事情かつてあるし……」

無然とした文哉をよそに、焼きそばを焼き始める邦子。

文哉「もういらないよ」

邦子「えーっ、焼く前にゆうてや」

文哉「あんたが作った焼きそばなんか、母さんに食べさせられるかよ」

文哉、出て行く。

○ 病院 病室

文哉が来る。

真弓の声「嫌だつて！」

廊下にまで響いてくる真弓の声に、慌てて病室に入る文哉。

温めたおしぼりを持った看護婦と真弓が押問答している。

看護婦「渡辺さん、身体、拭かないと」

真弓「嫌つたら嫌。こんな身体、他人に見せたくない」

看護婦「お風呂も入ってないんですから」

文哉「どうしたんだよ、母さん」
ベッドの横に疊んだ車椅子が置いてある。

看護婦「身体を拭かれるのを嫌がるんです」

文哉「お風呂は？」

看護婦「車椅子に乗って、介助付で入ることは出来るんですが、それも嫌みたいで」

真弓「他人に身体を拭いてもらうなんて、嫌なのよ」

文哉「だったら僕がするから」

真弓「息子なんて、もつと嫌！」

文哉「じゃあ、どうすりゃいいんだよ！」
真弓、シクシクと泣き出す。

真弓「梨花ちゃん……」

文哉「！」

真弓「女の子がいたら、こんな思いしなくつ

たって」

文哉「……」

絶望が表情に出ている文哉。

看護婦「（気を遣って）長い入院生活でスト

レスが溜まって、気が昂ぶっているんでし
ょうね」

文哉「すみません」

看護婦「また、気持が落ち着かれた頃を見計
らって来ます」

看護婦、去る。

枕に突っ伏して泣き続ける真弓。

文哉、口元に大きな笑みを作って、

文哉「大丈夫！必ず梨花を探してくるから」

真弓「……」

文哉「だから泣かないで」

病室を出る文哉。

○ ワンルームマンション

大きなクッションを背中に当て、ソフ
ア代りにベッドに座っている梨花。

携帯が鳴る。文哉からである。
放置する梨花。

○ 道（夜）

文哉が電話している。

留守電のメッセージ。

文哉「梨花、今どこに……」

言いかけて、一拍おいて、再びメッセ
ージを吹き込む。

文哉「……俺、死んだ妹の顔はもう思い出せ
ない。妹は俺にとっではお前だけだ。母さ
んだって同じだと思う。死んだ妹の代りな
んかじゃなかったよ。母さんも俺も、死ん
だ妹じゃなくて、お前が可愛くて仕方がな
かった。お前は俺の……」

メッセージを入れ終え、携帯をポケッ
トに入れて、歩き始める文哉。

○ ワンルームマンション
インターホンが鳴る。

梨花、大儀そうに立ち上がり応対する。
千夏「すみませーん。お借りしていたエコー
写真を返しにきました」

ドアを開ける梨花。

千夏「(封筒を渡しながら) 確かに、お返し
しますね」

鼻をひくつかせる梨花。

千夏、手にもったビニール袋を掲げて、
千夏「そこでタコ焼きの屋台が出てたんです
よお。梨花さん、タコ焼きは……」

梨花、恨めしそうな目で千夏とタコ焼
きの袋を見ている。

千夏「(嬉しそうに) 好きですよね！ おっ
邪魔しまーす」

梨花、少し不貞腐れた感じで千夏を部
屋に招き入れる。

タコ焼きをつつく梨花と千夏。

千夏「病院で貰うエコー写真って感熱紙とか
にプリントしてるんで、時間が経つと消え
ちゃうんですね。スキャンしたんで、後
で梨花さんの携帯にもデータ送っておきま
すね」

梨花「別に、興味ないし」

言葉とは裏腹に美味しそうな顔でタコ
焼きを頬張る梨花。

千夏「(嬉しそうに) 梨花さんがそんなにタ

コ焼き好きとは思わなかった」

梨花「ソースものが好き」

千夏「へえ。お好み焼きとか」

梨花「一番好きなのは焼きそば」

千夏「(探るように) ……お母さんが作って
くれた、とか？」

梨花、つまようじを舟皿に置いて、

梨花「ごちそうさま」

拒むように顔を背ける。

千夏「梨花さんて、養子なんですね」

梨花「……」

千夏「提出してもらった書類に書いてたんで
……ごめんなさい」

梨花「別に、それが何か」

千夏「私、生れたのは神戸なんです」

梨花「……」

千夏「震災で両親亡くしちゃって、幸いこつちに暮らしてた叔母家族が引き取ってくれて」

梨花「ふうん」

千夏「所長の江口は施設で育ったんです。何度か里親のところへ暮らしたこともあるみたいですけど、あの性格ですからね。生意気で里親さんに持て余されちゃったんでしょうね」

笑いながら話す千夏。

梨花「……だからって同情とか、必要ないから」

千夏「はい。だから同情はしません」

梨花、千夏を見る。

千夏「実母さんに必要なのは、同情じゃなくサポートだと私も江口も思っています」

梨花「……」

千夏「とか言っちゃって」

梨花「アンタ、ウザい」

梨花の瞳が少し優しく緩む。

○ 英里子のマンション キッチン

食器を洗っている文哉。

英里子の声「ねえー、ちよつと来てー」

○ 同 リビング

ソファに座った英里子が、携帯画面を見ながらニマニマしている。

文哉が手を拭きながらやって来る。

英里子「ねえねえ、これ見て見て」

文哉「何々？」

文哉、ソファの背中越しに携帯画面を見る。

胎児のエコー写真。

ギョツとする文哉。

英里子「可愛いでしょう！」

文哉「可愛い?!」

英里子「あと一ヵ月よ。待ちきれないなあ。早く産まれてこい」

文哉「……ちよつと出かけてくる」

英里子「今から？」

文哉「友達と約束してたの、忘れてた」

英里子「しょうがないな。ま、赤ちゃんが来

たらそうそう飲みにも行けないだろうから、今の内に行つてらっしゃい」

再び視線をエコー写真に向ける英里子。逃げるようにその場を去る文哉。

○ 居酒屋

千夏と江口が飲んでいる。

千夏、携帯をいじりながら、

千夏「胎児のエコー写真送ってあげたら、渡辺さんすつごく喜んでくれましたよ！」

江口、酩酊状態で項垂れている。

千夏「ちよつと、飲みすぎですよ。いくらマツチングが上手く行かなかったからって」

江口「だってあり得ないだろ。養子に貰いた

いって一度預かった子を返すなんて」

千夏「確かに実親の要望で成立しないことはあつても、その逆は今までなかったです」

江口「相性が合わないって言うんだ。相性も何も、相手は0歳児だぞ。合わせられるわけないじゃねえか」

千夏「そんな親の家で育てられるより、返してもらった方がよかったですよ。赤ちゃん

が欲しい家はいくらでもありますし、実際すぐに別の親御さんに引き取られたじゃな

いですか」

江口「……本当に、今回の親が非常識なだけだったのか」

千夏「そうに決まってるじゃないですか。そんな事言ってくる人、今までにいなかったですもん」

江口「言わないだけで、こんなはずじゃなかったって思いながら養子を育てている家もあるんじゃないか」

千夏「それは……」

江口「そう考えると怖くなるんだ。俺のやつ
てることって正しいのか。養親に疎まれな
がら成長するより、施設の方が案外よかつ
たんじゃないか」

千夏「……」

店内に設置されたテレビでニュースが
流れる。

アナウンサー「……幸い小火に気づいた住人
により火は消し止められ大事にはいたりま
せんでした。この界限では似た様な出火が
続いており、警察は連続放火事件と見て捜
査を進めています」

黙って酒を飲む千夏と江口。

江口「……愛着障害だよ」

千夏「えっ？」

江口「放火だよ。俺もガキの頃よくやった」

千夏「(呆れて) 何言ってるんですか」

江口「この犯人、まだこじらせたままなんだ
よ。早く見つけてやらないと、またやるぞ」
千夏「それは警察の仕事です。所長みたいな
悪ガキを増やさないためにも、マツチング
頑張りましょう」

千夏、ハイボールの入ったグラスを江
口のビールジョッキに合わせ、残った
ハイボールを飲み干す。

江口「(微笑んで) お前ってホント、うぜえ
な」

千夏がグラスをテーブルに置くや、身
を乗り出して千夏の頭を引き寄せ、キ
スする江口。

千夏「ちよっと、何すんですか！」

江口を押しつける千夏。

千夏「バカっ」

立ち上がり店を出て行く千夏。
その後ろ姿を見ながら笑っている江口。

○ 喫茶兼スナック「はえばる」

文哉がカウンターで酔いつぶれている。
最後の客を見送り、ドアを閉めて美也
が戻ってくる。

美也「ちよっとお、大丈夫なのー」

文哉「あと一カ月したら来るって……ヤダよ、絶対ヤダ」

美也「そう言えばいいのに」

文哉「英里子が傷つく」

美也「カッコいいこと言っちゃってさー。ホントは見捨てられるのが怖くて、シッポ振ってるだけのくせにー」

文哉「違う！」

カウンターを叩く文哉。

美也、宥めるように文哉の頭を撫でる。

美也「逃げちゃおうか」

文哉、美也を見る。

文哉「逃げるって……店どうすんだよ」

美也「また出せばいいさ。二人で食べていく分くらい、何とかなるさー」

美也、文哉の頭を自分の胸に引き寄せ、

美也「私が守ってあげる」

文哉「……不安なんだよ」

美也「何が？」

文哉「こうしていると居心地良くて、でもこの

ままじゃいけない気がする」

美也「それで別れるとかって言って、結局いつ

つも戻ってくるしネー」

文哉「俺、ママの息子の代わりじゃない」

美也「(揶揄するように)じゃあアタシは？」

お嫁さんは？ 母性を求めてんのは、いつ

も男の方じゃないさ」

文哉「……帰る」

文哉、出て行く。

○ 町（深夜）

人気のない住宅街を歩く文哉。

束ねられた段ボールや雑誌が置かれて
いる。

文哉、立ち止まり、ガソイルを雑誌
にまんべんなく掛ける。

ジッポライターで火を点ける。

○ 病院 エントランス

タクシーが数台停車し、診察帰りの患者や見舞客が行き来している。
文哉が院内へ入ってゆく。

○ 同 面談室

文哉と医師が向かい合って座っている。

医師「残念ながら腫瘍マーカーの数値は変わってません。このまま抗がん剤治療を続けていても……」
文哉「……」

○ 同 エントランス

出入り口に向って歩いている文哉。
自動ドアが開き、小学校低学年くらいの女の子と、四〇歳くらいの妻を連れた和彦（67）が入ってくる。

文哉「！」

和彦「……文哉か?！」

大きく頷く文哉。

和彦「すっかり大人になって」

文哉「どこか具合でも悪いの?」

和彦「いや、（妻の方へ顔を向けて）彼女の

お父さんが、ちよつとね」

和彦の妻「（察して）先に病室へ行ってるわね」

和彦の妻と娘、去る。

和彦「よかつたら、お茶でも飲まないか」

文哉「うん」

文哉と和彦、和やかに見合う。

○ 同 カフェテリア

和彦「そうか、真弓が」

文哉、アイスコーヒーを飲みながら頷く。

和彦「お見舞いとか、行った方がいいか?」

文哉「（首を振って）やめた方がいい。最近

気難しくなってるから」

和彦「……恨んでるだろうな」

文哉「……さっきの女の子、いくつ?」

和彦「七歳だ。(照れて) お前は、結婚は？」
文哉「してるよ。子供はいないけど」

和彦「早く作るといい。実の子は可愛いぞ」

文哉「だろうね」

和彦「いや、別にお前が可愛くなかったってわけじゃ」

文哉「え？」

文哉、怪訝そうに和彦を見る。

和彦「……母さんから、知らされてないのか」

文哉「何を……？」

コーヒーを飲み干す和彦。

和彦「そろそろ行くよ」

文哉「何だよ。何を隠してるの」

和彦「母さんが言っていないことを、私の口からは言えないよ」

文哉「僕のことだろ。教えてよ」

和彦「……戸籍……戸籍を見れば分かる。私からはそれしか……すまないが、もう行くよ」

文哉「……」

去っていく和彦の後ろ姿を見続ける文哉。

○ 産婦人科

診察室から梨花が出てくる。

梨花「！」

お腹を押さえ、前屈みに待合いのソファに腰をかける。

宥めるようにお腹を擦る梨花。

隣に座っていた女性がその様子を見て、

女性「蹴られた？」

梨花、女性を見る。お腹は大きくない。

梨花「はあ」

女性「何の予告もなく蹴られるから、困っちゃうわよね。お皿落として割ったり、シチュエーの入ったお鍋、落つことしそうになつたこともあるわ」

梨花「はあ」

女性「でも生きてるって証拠だから」

梨花「……」

女性「しばらく静かだなーって思ってたなら、

女性「……」

心音が止まったの」

梨花「……」

女性「全然、気が付かなかったあ」

梨花「……」

看護婦の声「マエハラさん」

女性「じゃ」

診察室へ入っていく女性の後ろ姿を見つめる梨花。

○ スーパー

梨花が買物している。

カゴの中にはお弁当と紙パックの牛乳。

レトルトのコンスープを手を取った

梨花。

コンスープの隣にミネストローネが置かれている。

梨花「……」

コンスープを戻し、ミネストローネの方をカゴに入れる。

○ ワンルームマンション

電子レンジがチンという。

梨花が中からラップを張ったボウルを取り出す。

熱いボウルの端っこを持って、素早く

テーブルの上に置く。

テーブルの上には先ほど買ったお弁当。

梨花、ラップを外し、薬でも飲むように

にスープを口に運ぶ。

梨花「……マッズ」

それでもスープを口に運び続ける梨花。

ふとスプーンを持った手が止る。

お腹を押さえながら、苦し気に眉間に皺を寄せている梨花。

○ 区役所

戸籍謄本を見ている文哉。

そこには「特別養子となる縁組の裁判の確定」と記載されている。

文哉「……」

マナーモードの携帯が着信しているのに気づき、出る。

英里子の声「もうっ、何度も掛けてるのに」

文哉「ごめん、病院だったから」

英里子の声「産まれたのよ！」

文哉「えっ」

○ オフィスビル フロント

スーツ姿のビジネスマンが行きかう中、英里子が携帯で話している。

英里子「かなりの早産だったけど、母子共に健康だった。一週間もすれば退院できるから、その時に引き渡してくれるって！」

○ 区役所

英里子の声「もしもし、聞いてるの？」

文哉、携帯を切ると、戸籍謄本を乱暴にポケットに突っ込み、走り出て行く。

○ 喫茶兼スナック「はえばる」

客がはけた後の店内で、美也がテーブルの上のグラスやカップを片付けている。

カウベルがけたたましく鳴ったと思ったら、文哉が足早に入ってくる。

美也「あら」

文哉「逃げよう！」

美也「どうしたのさ？」

文哉「産まれたんだよ、赤ん坊が、一週間後に、来るんだよ」

美也「急にそんな事、」

文哉「一緒に逃げようって言ったじゃないか。他所の町で暮らそうって」

美也「お母さんはどうするの？」

文哉、ポケットから戸籍謄本を取り出す。

クシャクシャになった謄本を見る美也。

美也「……」

文哉「亜実は、死んだ妹は実の子なんだ。僕を引き取ってから妊娠したんだよ。(自虐

的に笑って）これでやっと分かったよ。僕が可愛がられるはずなんてなかったんだって」

美也「……」

文哉「ママ、お願いだよ。助けてよ。守つてよ」

美也「……戻れないよ」

文哉「戻らないよ！」

美也、エプロンのポケットから鍵を取り出し、

美也「とりあえずウチにあればいいさ」

美也、文哉の顔を引き寄せてキスする。

文哉「ありがと、ありがと」

文哉、憑かれたように美也に口づける。

○ 産婦人科 病室

梨花がベッドに横たわっている。

梨花の隣には産まれて間もない赤ん坊。

梨花「……」

ふとサイドテーブルに置かれた携帯が目に入る。

携帯に手を伸ばす梨花。

留守番電話が入っている。

携帯を耳に当てる。

文哉からのメッセージ。

文哉の声「……母さんも俺も、死んだ妹じゃなくて、お前が可愛くて仕方がなかった。

お前は俺の……」

梨花「……」

聞き終え、携帯を再びサイドテーブルに置く梨花。

赤ん坊の頭の匂いを嗅ぐ。

梨花「……」

○ NPO法人「キャベツ畑」

事務所の電話が鳴る。

千夏「ハイ、キャベツ畑……ああ、いつもお

世話に……えっ……ええっ！」

江口、顔を上げる。

千夏「見つまり次第、はい……」

受話器を置くや、

千夏「所長っ、梨花さんがっ、」

江口「逃げたのか？」

千夏「(頷く)」

江口「チクショウ、変わった様子とかなかったのかよ」

千夏「(首を振って) 養親の渡辺さんに連絡しないと……」

電話しようとする千夏の手を止める江口。

千夏「？」

江口「どうせ戻ってくる」

千夏「！ 引き渡し、今日ですよ！」

江口「適当言って引き延ばせ」

千夏「引き延ばせたって」

江口「いいな、絶対逃げたとか言うな」

千夏「そんなあ」

○ カフェ

緊張した面持ちで英里子が座っている。やってくる千夏、英里子を見つめるや慌てて駆け寄る。

千夏「お待たせいたしました。(ウエイトレスに) ホットで」

英里子「いえ、私が早く来すぎたので」

千夏「……」

英里子「……」

手元をみたまま、なかなか切り出せない千夏。

千夏「あの、赤ちゃんなんですけど、その……： 詳しいええ、今日はご主人は……」

英里子「申し訳ございませんっ」

深々と頭を下げる英里子、面喰う千夏。

千夏「え……」

英里子「失踪しました」

千夏「ええっ！」

英里子「本当に申し訳ございません。成立料はお支払いしますので」

千夏「はあ」

英里子「お金の問題でないことは分かってま

す。養親としても夫婦としても失格ですつ」
千夏「あの、落ち着いて、まずはコーヒーでも、ねっ」

英里子「はい……」

コーヒーカップを手に取る英里子。

口元にカップが近づいた途端、

英里子「ウッ」

カップを乱暴に置いて立ち上がると、
口を押えてトイレへ駆け込む。

○ 同 トイレ 手洗い

トイレの手洗いのシンクで戻している

英里子。

息をつき、顔を上げる。

英里子「……」

○ 郵便ポスト

沖縄県の住所と「金城隼人様」と書かれた▶▶サイズの茶封筒をポストに投函する美也。

○ 喫茶兼スナック「はえばる」

段ボール箱の中にグラスや食器を詰める美也。

カウンターのの上にはフライパンや包丁、
泡立て器などの調理器具が置かれている。

荷造りをしている美也と文哉。

文哉、手を止めて、

文哉「一旦、家に戻ってくる」

文哉を見る美也。

文哉「これ、渡してこようと思って」

文哉の名前と判の押された離婚届。

美也「郵便でいいじゃない」

文哉「でも、一応、挨拶っていうか」

美也、視線を荷造りしていた手元に戻して、

美也「早く帰ってきて、荷造り手伝ってよ」

文哉「わかってる」

店を出る文哉の背中を見る美也。

美也「……」

○ 英里子のマンション エントランス 外

文哉がオートロックを押そうとすると、
「あの」と声を掛けられる。
文哉が振り返ると、隼人が立っている。
怪訝そうに隼人を見る文哉。

隼人「俺、金城隼人です」

文哉「はあ」

隼人「島袋美也の息子です」

文哉「えっ……あの、僕は、その」

隼人「あの女、人殺しですよ」

文哉「え？」

隼人、スクラップされた新聞や雑誌の
切り抜きを文哉に手渡す。
スクラップブック見る文哉。

そこには美也と男の写真や、「交際相
手による虐待死」「母親も虐待に関与
か!!」という見出し記事の切り抜き。

隼人「親が離婚して、俺は父と、あの女は妹
を引き取ったんです。その後、あの女は男
と暮らし始めて、それで妹は、妹は……」

文哉「でも、それは男のせいで、ママは、美
也さんは」

隼人「分かかって、止めなかったんですよ。
男から捨てられたくなかったから。それっ
て殺したのと同じじゃないですか」

文哉「……」

隼人「それ、返してください。十分見たでし
よ」

文哉「あ、ああ」

文哉が差し出したスクラップブックを
剥ぎ取るように掴み、去ってゆく隼人。
その後ろ姿を見ている文哉。

○ 同 室内

ノートパソコンで美也の事件を検索し
ている文哉。

傍らに離婚届が置いてある。

「発見時の体重は三歳児並、体中に煙草の火

を押し付けられた痕」

「なぜ止めなかった？ 交際相手による心理的
DVが原因か」

「那覇地裁 母親に懲役8年の実刑判決」

英里子が帰ってくる。

文哉 「あつ、」

パソコンを閉じ、立ち上がる文哉。

英里子 「……」

英里子、テーブルの上の離婚届に目を
やる。

文哉 「ごめん、僕、あの」

英里子 「妊娠した」

文哉 「えっ？」

英里子 「帰る途中、検査薬で確認したから、
間違いないと思う」

文哉、英里子に近づきひざまずくと、
英里子のお腹に耳を押し当てる。

文哉 「(感極まって) アアー、アアー、アア

ー」

英里子 「わかる？」

文哉 「「わかんない。全然わかんない。けど
わかりたい。俄かにわかりたくなってきた」

文哉の髪を撫でる英里子。

○ 喫茶兼スナック 「はえばる」(夜)

文哉が来る。

美也、荷造りの手を止めて、笑顔で、

美也 「戻って来てくれて良かったー」

文哉 「行けないよ」

美也の笑顔が固まる。

美也 「どうして？」

文哉 「息子さんに会った」

美也 「隼人に！」

文哉 「事件のこと聞いたよ」

美也 「……」

文哉 「そういうことだから、じゃあ」

踵を返しかけた文哉に手を伸ばし、引
き留める美也。

美也 「あの時は私、普通じゃなくって……頼
れる人が誰もいなくなつて、寂しくつて、一

人になつたら思つたら、不安で、何も
考えられなくなつて」

文哉「一人じゃないだろ！ 子供がいるだろ
！」

美也「だから余計に辛いさあ！」

美也、カウンターの椅子に座り込んで、
頭を抱えて泣く。

美也「文ちゃんのこと、あんなに可愛がった
のにさあ、中坊の頃から、本当の息子みた
いに可愛がったのにさあ」

文哉の表情が悲しく曇る。

文哉「僕だって、ママのこと大好きだったよ。
でもこれはダメでしょ。自分の子供を見殺
しにする人間と、平気な顔して一緒になん
ていられないよ」

美也、文哉の手にすがって、

美也「お願いだからあ、お願いだから、一人
にしないで」

文哉「もう解放してよっ」

美也の手を振りほどく文哉。

二人の息遣い。

文哉「……英里子が妊娠したんだ」

美也「え……」

文哉「妊娠したんだ。僕の子供だよ」

美也「……」

文哉「だから、行けない」

美也に背を向ける文哉。

美也、カウンターのの上に並べられた包
丁に手を伸ばす。

文哉「！」

美也「……戻れないって、言ったよね」

文哉、脇腹を包丁で刺されている。

美也「離さないさ。今度はもう、帰ってこな
いって分かるもん」

文哉、美也を突き飛ばし、カウンター
に叩きつけられた美也の手から包丁を
奪おうとする。
揉み合う二人。

文哉「もう、解放してよ。お願いだから」

ずれ落ちる美也を抱きかかえ、床に倒れ込む文哉。

文哉「119番、119番」

ポケットから携帯を出す文哉。

着信音、母である。

文哉「ごめん、今日は行けそうに、」

母の声「梨花ちゃんが来たのよ！」

文哉「え……」

真弓の声「しかも可愛い赤ちゃんと一緒に。

もう驚いたわよ」

文哉「……無事産まれたんだ」

真弓の声「ごめんね、文哉」

文哉「え？」

真弓の声「文哉だって辛かったのに、私、いつもあなたにキツく当たって……事故を起した運転手も死んで、誰も、どこも責めるところがなくなって、あなたの事ばかり怒って……」

文哉の目に涙が浮かぶ。

真弓の声「文哉がいたから私は今までやってこられたわ。文哉が私の息子で本当によかった」

文哉、拭っても拭っても涙が止まらない。

真弓の声「いつもお見舞いありがとうね。今日はゆっくり休んで、また焼きそば買ってきてね」

電話が切れ、ツーツ音。

文哉の顔、蒼白で脂汗が浮かんでいる。

美也「……燃やして、くれない」

文哉、同じく血の気を失った美也を見る。

美也「これだと保険金が下りないから……火事なら、」

文哉「保険金？」

美也「受取人が隼人なのよ。受け取ってくれないかも知れないけど」

文哉「(弱々しく笑って) やっぱり、お母さんなんだな」

文哉、ポケットからライターオイルを

文哉 「行くよ、ママ」
取り出し、当りに撒く。

静かに目を閉じる美也。
ジッポライターの火を点ける。
瞬く間に店内に燃え広がる炎。

○ 渡辺家 リビング

赤ん坊を抱っこ紐で抱えた梨花、キャリーケースとスポーツバッグを部屋の隅に置くとソファに腰掛ける。
携帯を取り出し、電話する。
何度目かのコール音の後、諦めて切る。
表で消防車のサイレンの音。

○ 喫茶兼スナック 「はえばる」。

床に落ちた携帯が鳴っている。
炎に包まれる。

○ 同 外

消防車がやってくる。
店の前には集まった野次馬が遠巻きに見ている。

「中にまだ人がいるみたいよ」
「これだけ燃えてちや助からないだろ」

隼人 「どけっ、お袋がいるんだ」
隼人がやってくる。

野次馬整理の人員が立ちはだかつて引き止める。

隼人 「お袋っ、お袋ーっ」
建物が崩れ落ちてーー。

○ 英里子のマンション

きれいに盛り付けたちらし寿司をテーブルの上に置く英里子。
ワインクーラーに入った白ワインのボトル、ミネラルウォーター、から揚げとポテトサラダが置かれている。

英里子 「パパはまだでしゅかね」
まだ平たいお腹を撫でながら話しかける英里子。

固定電話が鳴る。

英里子「ハイ、もしもし……主人は出掛けて

……明潮新人賞……受賞?! 本当ですか!」

受話器を置くや、狂喜乱舞する英里子。

英里子「やったー! パパすごいでしゅ!

ベビちゃんが産まれてくる頃には有名作家

になつてましゅよ」

ひとしきり浮かれはしゃいでから、テ

ーブルの前の椅子に座る英里子。

英里子「早く帰ってこないかなあ」

幸せそうに頬杖をつく英里子。

再び固定電話が鳴る。

○ 病院 病室

看護師が『渡辺真弓』のプレートを外す。

真弓がいたベッドには誰もおらず、剥き出しのマットレスに窓から光が差し込んでいる。

○ スーパーマーケット

髪を黒く染めた梨花がレジ打ちしている。

○ 保育所（夜）

保育士から赤ん坊を抱き受け、抱っこひもを結ぶ梨花。

片方の手には食材の入ったエコバッグ、もう片方にはオムツ等に入ったマザーズバッグ。

○ 渡辺家 リビングダイニング（深夜）

灯りが消えた部屋。

整理ダンスの上に真弓の骨壺と遺影。

本棚の上には幼い梨花と文哉、真弓の
が写った写真が飾られている。

どこからともなく聞こえてくる赤ん坊の泣き声。

電気が点き、赤ん坊を抱いた梨花が眠そうに目をこすりながら入ってくる。

× × ×
哺乳瓶で赤ん坊にミルクを与える梨花。
眼の下にはクマが出来ている。
ミルクを飲み終え、眠る赤ん坊。

梨花「……」

携帯の留守番電話に残されたメッセージを聞き直す梨花。

文哉の声「……死んだ梨花じゃなくて、お前が可愛くて仕方がなかった。お前は俺の……」

梨花「……」

文哉の声「初恋だった」

抱いている赤ん坊の頬に涙の粒がポトリと落ちる。

涙を指でぬぐう梨花。

次から次へと溢れる涙に指が追いつかない。

涙から嗚咽に代わる。

携帯にSNSの通知音が鳴る。

着信したメッセージ。

「赤ちゃんを抱えての生活、大変ではありませんか。困ったことがありますたら、いつでもご相談ください。NPO法人「キャベツ畑」」

○ NPO法人「キャベツ畑」外

赤ん坊を抱いた梨花が立っている。

ドアノブに手をかけようとした瞬間、

赤ん坊の手がペチリと梨花の顔に当る。

赤ん坊を見る梨花。

梨花を見ている赤ん坊。

梨花、ドアノブから手を引っ込め、赤ん坊を抱いたまま立ち去る。

○ 渡辺家 外

赤ん坊を抱いた梨花が歩いてくる。

ワタルの声「梨花」

家の鍵を開けようとしていた梨花が振り返ると頭を丸めたワタルがいる。

ワタルを睨みつける梨花。

ワタル「ごめん！」

深々と頭を下げるワタル。

梨花「……」

ワタル、赤ん坊を見て、

ワタル「この子が俺の……可愛いなあ」

赤ん坊に手を伸ばしかけたワタルの頭

を音を響かせてはたく梨花。

ワタル「痛っ！」

頭を押さえるワタル。

赤ん坊がキャツキヤと笑う。

ワタル「笑ってる……ありがとう、梨花。赤ち

やんをちゃんと育ててくれて」

梨花「育てられるわけなんてない！」

ワタル「……」

梨花「持ち家があるから生活保護も受けられ

ない。昼はレジ打ちして、夜は赤ん坊のミル

クで何度も起こされて、朝になったらまた

レジ打ち……」

話している内に涙が出てくる梨花。

ワタル「……」

梨花「さっきも養子縁組のあつ旋所へ行った

んだよ。しかも二回目……最低っ」

ワタル「なんで、この家を売らなかったんだ

よ。梨花、嫌ってたろ」

梨花「お母さんもお兄ちゃんも死んで、この家

までなくなっちゃったら、子供の頃の私が

消えちゃう！」

崩れ落ちるように、その場にへたりこ

む梨花。

ワタル「梨花っ」

梨花「こんな家、足元見られて買ったたかれる

だけだよ。それで何年？何か月生活できん

の」

ワタル「大丈夫、梨花！俺がついてる」

カッと手を上げる梨花。

次の瞬間、別の手がワタルの頭をはた

く。

梨花「!!」

ワタル「母ちゃん、痛ってえ！」

ワタルの母「ごめんね、梨花さん。このバカの

せいで」

ワタル「(梨花へ)ウチのお袋。(母へ)えっと
彼女が、」
ワタルの母「話は後。(梨花へ)あんた、ひど
い顔色よ。赤ちゃんは看ててあげるから、と
りあえず寝た寝た。(赤ちゃんへ)バアバだ
よお、可愛いねえ」
梨花「……」
ワタルとワタルの母に助けられて起き
上がる梨花。

○ 本屋

少しお腹が大きくなった英里子が本棚
から文芸誌『明潮』を取り出す。
表紙に「明潮新人賞 受賞作『赤いキャ
ベツを抱きしめて』全文掲載」とある。

Λ 完 V

参考資料

『心にナイフをしのばせて』

奥野修司 文藝春秋

『愛着障害:子ども時代を引きずる人々』

岡田尊司 光文社

『産んでくれたら200万円…特別養子縁組の真実』

阪口源太 Kindle 電子書籍